資料３

第２回学習・利用形態部会での主な議論内容

○現行の都立図書館の利用のされ方は大学図書館に近いのではないか。

○大学では、他の利用者から独立しているタイプの席が好まれる。

○利用者は１か所にとどまるわけではない。独立した席と人が多い場所（席）を行き来できる回遊性があるとよい。

○スツール席は、一般的にはグループ利用や順番待ちエリアにおいて、よく使われるものだと思う。

○隣席との間仕切りの形、机の大きさや形状、照明設備、パソコンの利用のしやすさ等、利用者は様々な要素を踏まえて席を選ぶもの。利用者自身が選択できるよう、多様な環境を提供することが必要。

○学びのツールが変化する以上、それに対応する電源設備を整えることは絶対に必要。

○音については、気になる音は人によって様々。パソコンや電卓のキータッチ、新聞や雑誌をめくる音、鉛筆の筆記の音など。適切なゾーニングを行い、「このスペースは音を出してもよい」と明確に示す方が利用者は使いやすいのではないか。

○会話について。グループだけでなく、2,3 人がお互いに教え合いながら利用できるような、会話を許容する学びの場もあるとよい。

○大学生は共通課題にグループで取り組む、という明確なニーズがある。大学図書館もあるが、都立図書館では東京に関することなどをさらに詳しく調べることができ、館内で資料作成作業もできる、という利用環境が用意され、周知されていくとよい。社会人については、特定のテーマを提供し、参加者を募ってグループで学習してもらうのも一つではないか。大学生、社会人いずれも調べ方のサポートとして司書が関わっていき、レファレンスや、正確な情報源の有用性を体感してもらうとよい。

○今後は、図書館で人と人がつながっていけることが大切。新たな知的活動や知的刺激に出会える場となるように。そのような場として、展示・ギャラリーだけでなく、講演会後の交流会や、通りすがりにイベントを楽しめるような仕掛けも考えられる。

○（前回定例会資料に出した）ものづくりや演奏等に関する設備、施設について。都立図書館はそうした設備よりも「調べる」ということに注力した利用環境にしていくほうがよいのではないか。

○レファレンスサービスは、これまで以上に利用されるよう、区市町村立図書館ともさらに連携を深めていってほしい。

○調査研究を進める上で、デジタル資料の重要度はさらに高まっている。学生も大学図書館でデジタル資料に慣れていれば、卒業後の利用ニーズもデジタルに振れてくるのではないか。VPN 等、デジタル面での取組をもっと進めていく必要がある。